イタリア映画界の異端児

アゴスティの世界

快楽の園 | ふたつめの影 | カーネーションの卵 | 人間大砲 | 天の高みへ
クワルティエーレ 愛の渦 | シルヴァーノ・アゴスティ 見えないものを見る人

「私がシルヴァーノ・アゴスティに出会ったのは、マルコ・ベッロッキオの『ポケットの中の握り拳』(1965年)の編集作業中のことでした。 その後、私は彼の映画をすべて観て、『快楽の園』のために音楽をつけることになりました。あれは過小評価されていますが、観客を震撼させるとても並外れた作品ですよ。
今回は『クワルティエーレ 愛の渦』のために作曲しました。私が思うに、シルヴァーノは現代の才能あふれる完璧な監督のひとりですよ」

—エンニオ・モリコーネ

速報
無差別映画批評 シネマハスラーでおなじみ!
日本を代表するヒップホップグループ RHYMESTER
宇多丸さんの12/9トークショーへの出演決定!!

ふたつめの影 *La seconda ombra*

精神医療の先進国イタリアの伝説的精神科医フランコ・バザーリアが、1961年に北イタリアの町ゴリツィアで感じた苦悩と大いなる改革。この分野では後進国と言われる日本での上映が大きな意義を持つことは間違いない。

「心の病はあらゆる病気と同じように尊重されるべきだ。心を病んでいても人間なんだ」 —バザーリア

「医師も看護師も 治療だと言ってわしを虐待していた…わしは自分のふたつめの影に逃げ込んだんだ。すると何も感じなくなった」 —劇中のセリフより

京都、大阪、神戸、名古屋で好評を博した
アゴスティ回顧映画祭が、ついに東京進出!

12/3(土)〜16(金) 吉祥寺バウスシアター

めくるめく映像美で数多くの巨匠に愛されるシルヴァーノ・アゴスティ
代表作6本+アゴスティ入門ドキュメンタリーを関東初上映!

□主催/吉祥寺アゴスティ映画祭実行委員会 □上映協力/大阪ドーナッツクラブ 吉祥寺バウスシアター

シルヴァーノ・アゴスティとは? Silvano Agosti

作家、映画監督、詩人、俳優。1938年、ブレーシャ生まれ、内乱状態に陥った第2次大戦末期の北イタリアで幼少期を過ごす。物心ついた頃から映画や文学に親しみ、飛び級でさっさと高校を卒業した17歳のとき、崇拝していたチャップリンの生家を訪れたい一心で、寝袋を担いでヒッチハイクでロンドンへ。広い世界を意識した彼は、そのままイタリアへ戻ることはせず、職を転々として日銭を稼ぎながら、ヨーロッパ各地、バルカン、中東、北アフリカと地中海諸国を自分の足で巡り、旅の終着地にローマを選んだ。彼は今もよく口にする。「16歳になったら、若者はすべからく家を出て世界を見てまわるべきだ」と。

ローマでも自由気ままにアルバイトをしては、古本を買いあさり、シェイクスピアやドフトエフスキー、チェーホフなど、重要な作家のほとんどをこの時期に全集で読破し、創作の血肉とした。ある日、国立映画学校では授業料はおろか、寝食すべてが無料との情報を仕入れたアゴスティは、即監督コースへの入学を決意。イタリア内外の著名な映画人に接する機会を持ちながらめきめきと実力をつけ、62年に硬直化したカトリックのあり方を皮肉った卒業制作を撮り、首席で卒業。その褒美としてアメリカかモスクワで映画を学ぶ権利を得た彼は、文化的により違いのあるモスクワを迷わず選択。ソ連の国立映画学校で編集技術を重点的に学びながら、エイゼンシュテイン研究に没頭する。旅好きは相変わらずで、その機会にソ連15カ国を巡り、ローマへ戻る。

イタリア国立映画学校時代の級友マルコ・ベッロッキオのデビュー作にしてイタリア映画史に燦然と輝く名作『ポケットの中の握り拳』(1965年)に編集マンとして参加した後、『快楽の園』(1967年)で劇映画デビュー。権力、イデオロギー、世間の常識など、人間らしさを損なうあらゆるものから自由であるために、表現者は経済的にも精神的にも何ものにも依りかからないで創作を行うべきだという考えを徐々に突き詰めていく。アゴスティは映画製作配給会社、2スクリーンの映画館、出版社を次々と自身の手で経営するようになる。83年に開いた映画館アッズッロ・シビオーニ座はローマ有数の名画座として知られ、映画ファンはもちろんのこと、映画人たちからも愛されている。

これまで製作に関与した映画の本数は劇映画・ドキュメンタリー合わせて50本余り。愛、労働、性、精神病、宗教、権力など、扱うテーマの幅の広さと彼独自のラディカルな表現から、驚異のインディペンデント監督として各国の映画祭で絶賛されており、イタリアはもちろん、アメリカやフランスでも再評価の機運が高まっている。

小説や詩の執筆にも精力的に取り組み、イタリア最高峰の文学賞であるストレーガ賞ノミネート2作品をはじめとして、文筆家としても大きな成果を残している。日本では、イタリアでベストセラーになった小説『誰もが幸せになる1日3時間しか働かない国』(マガジンハウス)と『罪のスガタ』(シーライトパブリッシング)の2作品が出版されており、ラジオ番組やブログ、雑誌などで話題を呼んでいる。今秋、ローマの市井の人々を描いた92本の掌編をまとめた『見えないものたちの踊り』(シーライトパブリッシング)が電子書籍として出版されたばかり。

2011年現在、73歳。アゴスティは99歳まで生き、人生最後の日に愛を交わして「最高の人生だった」と言って最期を迎えると公言している。まだまだその旺盛な活動から目が離せそうにない。

音楽家エンニオ・モリコーネとアゴスティとの関係

映画音楽で特に知られるイタリアの作曲家。1928年、ローマ 生まれ。国立音楽院で作曲技法を学び、テレビやラジオなど、マスメディアの世界で腕を奮った後、映画界へ。60年代、セルジョ・レオーネ監督とのコンビなどで知られる「マカロニ・ウエスタン」の作品群で名を馳せ、イタリア国外でも知名度が上がっていく。ニーノ・ロータ亡き後、実力者の多いイタリア映画音楽界を牽引してきた立役者である。

恋愛もの、文芸作品、歴史スペクタクル、犯罪もの、ホラー、コメディー、あらゆるジャンルの映画音楽を450本以上手掛けており、ロックから交響曲まで、音楽的な幅もとても広い。本国では優れた現代音楽家としても知られていて、その実験精神は映画音楽からもうかがえる。1987年には、『アンタッチャブル』でグラミー賞を獲得(2007年、アカデミー賞名誉賞)。1989年の『ニュー・シネマ・パラダイス』では日本人の心を鷲掴みにし、2003年には大河ドラマ『武蔵MUSASHI』の主題歌も担当した。熱烈なファンが多く、日本でもマニアックなウェブサイトがいくつも開設されている。

アゴスティとの親交は60年代から続いており、最初の共作『快楽の園』の作曲報酬がチョコレート味のジェラートだったという珍エピソードも残っている。アゴスティのためには、今回上映する3作品を含めた計4作品のサントラを手掛けている。それら4作品のみを集めたコンピレーションアルバムも発売されていて、日本では輸入盤として入手可能だ。

大阪ドーナッツクラブとは?

大阪外国語大学(現大阪大学外国語学部)イタリア語学科で共に学んだ野村雅夫と有北雅彦が中心となり、イタリアのノーベル文学賞劇作家ダリオ・フォーの演劇を翻訳上演することをきっかけにして、2005年結成。
メンバーは現在12名で、それぞれ本職は実に様々。映画関係に翻訳関係、はたまた料理関係の会社員、関西の小演劇界で活躍する脚本家・俳優、大阪の人気ラジオ局FM802のDJ、銀行員、新聞社の下働き、そして主婦など。イタリアへの興味という共通項はベースとして持ちながらも、当然ながら興味もそれぞれ。グループとしてのモットーは「知的好奇心の輪を広げる」。
映画の上映会、小説や絵本の出版、舞台の上演、写真展の開催等、映画・音楽・文学・演劇・写真・食文化など多方面にわたる好奇心を企画として形にしてきた実績がある。
次なる計画として、企画イベントを即実行に移せる、居心地の良い文化基地を作ろうと目論んでいる。

Osaka Doughnuts Club
大阪ドーナッツクラブ

吉祥寺バウスシアター
吉祥寺駅北口(中央口)/サンロード街/西友先左側
tel.0422-22-3555
http://www.baustheater.com
自由席・入替制

12/3〜16 アゴスティ特集上映 プログラムはコチラ

上映作品

※全作品とも、監督から直接提供を受けたデジタル素材による上映となります。フィルムによる上映ではない点、ご了承ください。

A 快楽の園 *Il giardino delle delizie*

※Aプロは2作品同時上映です。

医師カルロは、ガールフレンドのカルラが妊娠したことで、しぶしぶ結婚を承諾。ところが、ハネムーン先のホテルで早くもすれ違うふたり。フラストレーションを感じるカルロの脳内では過去と未来が交錯し、謎めいた女の影も忍び寄る。

公開当時は法的に離婚が認められていなかったイタリア。本作はカトリック色の濃厚な公権力から検閲され、20分程度カットされたうえ、さらにR18指定となった。ラングやルノワール、ベルイマンといった巨匠も絶賛したみずみずしい映像感覚で、現代にもそのまま通じるテーマを突きつけた、アゴスティ鮮烈のデビュー作。モリコーネの異色なロックサウンドは必聴。

●1967年●イタリア●モノクロ・74分●監督・脚本／シルヴァーノ・アゴスティ●音楽／エンニオ・モリコーネ●キャスト／モーリス・ロネ、イヴリン・スチュワート

A シルヴァーノ・アゴスティ 見えないものを見る人 *Il senso del mistero*

アゴスティと同世代の1935年生まれ（昨年他界）で、制作した映像作品は、ドキュメンタリーや実験映画を中心に、なんと長短あわせて600本以上。イタリアを代表する記録映画監督ブルナットが、シャレた構成でわかりやすく撮りあげた貴重な一本。これを観れば、アゴスティの輪郭がくっきりと浮かび上がる！ 代表作の予告編的な映像、アゴスティの生活、映画づくりの裏側など、「アゴスティって誰？」という人にはうってつけ。

作中に登場するフランコ・ビアーヴォリは映画監督で、アカデミー賞ドキュメンタリー部門にノミネートした代表作『青い惑星』(1982年)は、アゴスティがプロデュースした。ファビオ・ヴォーロは、今をときめく作家・ラジオDJ・俳優であり、今イタリアで彼を知らない人はいないというほど人気がある。ヴォーロの才能を発掘したのが、他ならぬアゴスティである。監督のブルナットは、1987年には坂本龍一を被写体にした作品を撮るなど、日本への興味も持ち合わせていた。

●2003年●イタリア●カラー・30分●監督／パオロ・ブルナット

B ふたつめの影 *La seconda ombra*

1961年、北イタリアはゴリツィアの県立精神病院。ひとりの用務員が、洗濯物を回収しながら、施設内の暴力的な現状をひそかに観察している。

実は彼は新しく赴任する院長であった。後日改めて颯爽と登場した彼は早速職員たちを集め、病院を本質的に改変する意志を表明。拘束服、電気ショック、冷水シャワーなど、それまで平然と行われていた「医療行為」は、即刻排除。閉ざされていた精神病院の扉を開け放ってしまうなど、それまでなら考えられなかったアイデアを次々と実行に移していくのだが…。

この映画は、精神医療の先進国イタリアの伝説的精神科医、フランコ・バザーリア(1924-1980)に捧げられている。彼が現場で感じた苦悩と喜び。その成果としての大いなる改革。患者たちと一緒に挑んだ精神病院制度の解体。バザーリアと浅からぬ縁があり、精神医療についてのドキュメンタリーを若い頃から撮り続けてきたアゴスティが、バザーリアの死後20周年を機に、詩的な映像とドキュメンタリータッチを織り交ぜた独自のスタイルで渾身の映画化。

精神医療後進国と言われて久しい日本での上映が既に反響を呼び始めている一方、「新しい発想を持つこともさることながら、古い観念を乗り越えるほうがより難しいのかもしれない」という普遍的な捉え方もできる作品だ。

●2000年●イタリア●カラー・84分●監督・原案・脚本・撮影・編集／シルヴァーノ・アゴスティ
●音楽／ニコラ・ピオヴァーニ●キャスト／レーモ・ジローネ、ゴリツィアとトリエステの旧精神病院入院患者およそ200名

RHYMESTER 宇多丸さん出演!
日本屈指のヒップホップグループ「ライムスター」のラッパーにして、J-POPから映画、アイドル、ゲーム、本など、あらゆるテーマを語り尽くす当代随一のトークマスター　宇多丸さんとアゴスティの友人であり、アゴスティ作品の翻訳家でもある野村雅夫のトークセッションをお楽しみください！

【特別トークショー開催！】速報!

★12/9(金)　「アゴスティ入門　～商品化されない表現の魅力～」

2005年、パゾリーニの映画研究のためにローマへ留学していた頃、偶然アゴスティの経営する映画館を訪れたことから交流を始め、それまで日本ではまったく知られていなかった彼の功績を初めて体系的に紹介しようと決意した大阪ドーナッツクラブ代表の野村雅夫(FM802 DJ)は、帰国後にアゴスティの小説を邦訳出版し、回顧映画祭を企画してきた。豊富なエピソードを交えながら、アゴスティの特異な表現者としてのスタンスをわかりやすく解説。

♣12/10(土)「日本で地獄を垣間見た大熊さんに聞く 精神病院を捨てたイタリアの現状」

『精神病院を捨てたイタリア 捨てない日本』などの著者であり、元朝日新聞記者の大熊一夫氏をお招きして、野村雅夫がお話をうかがう。
※**大熊一夫**:1970年、アルコール依存症を装って精神科病院に潜入入院し、『ルポ・精神病棟』を朝日新聞社会面に連載。鉄格子の内側で日常的に行われていた入院者虐待を白日のもとにさらし、日本の精神医療改革に一石を投じた。現在も精神科病院廃絶に向け活動を行っている。
2008年、イタリア精神保健改革の父といわれる精神科医フランコ・バザーリアの名を冠したフランコ・バザーリア学術賞を受賞。

速報!! 『心病める人たち』『開かれている病棟』の著者であり、日本でいち早く、精神科病院の完全開放開放病棟化を実現した、精神科医の**石川信義**氏にもご登壇いただくことになりました!

上映時間＼12月	3日(土)	4日(日)	5日(月)	6日(火)	7日(水)	8日(木)	9日(金)	10日(土)	11日(日)	12日(月)	13日(火)	14日(水)	15日(木)	16日(金)
11:00～	A	F	E	D	C	B	E	F	D	C	B	A	F	E
13:00～	B	A	F	E	D	C	D	A	E	D	C	B	A	F
15:00～	C	B	A	F	E	D	C	B ♣ + 大熊一夫氏トークショー	F	E	D	C	B	A
17:00～	D	C	B	A	F	E	B		A	F	E	D	C	B
19:00～	E	D	C	B	A	F	A + ★ アゴスティ入門トークショー	C	B	A	F	E	D	C

C クワルティエーレ　愛の渦 *Quartiere*

ローマ市内、監督の住むヴァチカン市国にほど近い界隈で展開する4つの物語。クワルティエーレとは、「地区」や「エリア」といった意味。若年期、青年期 、壮年期 、老年期という人生の4つの段階。それぞれの物語が、冬・秋・夏・春の順に季節に対応する仕掛け。共通するのは、孤独であり、誰かしら、あるいは何かしらの「不在」だ。

ドキュメンタリー作家でもあるアゴスティが、クロースアップを多用した独特の映像美と想像力を駆使して、はみ出し者たちが生きた愛の現実を情感たっぷりに描く。「人間らしく生きていない」ことを自覚していない人たちに捧げられている。すべてが実話なのに、すべてがファンタジック。モリコーネによるサントラは、彼のベストスコアに挙げる声も多い。

●1987年●イタリア●カラー・81分●監督・脚本／シルヴァーノ・アゴスティ●音楽／エンニオ・モリコーネ

D 人間大砲 *L'uomo proiettile*

毎晩サーカスで「人間大砲」として打ち上げられる「砲弾男」。火付け役の女イヴリンと恋に落ちた彼は、愛情と嫉妬について悩みを深くしていくものの…。イタリア最高峰の文学賞ストレーガ賞最終候補にノミネートしたアゴスティの同名小説を自ら映画化。文明観、愛と嫉妬、映画へのオマージュといったテーマがぎゅっと詰まった作品。「芸術としての映画」を発明したとされるジョルジョ・メリエス(1861-1938) に捧げられている。

引用されている映画作品は以下の通り。タルコフスキー『鏡』、エイゼンシュテイン『イワン雷帝』『アレクサンドル・ネフスキー』『ストライキ』、ウェルズ『審判』、ボンテコルヴォ『アルジェの戦い』、レッジョ『コヤニスカッツィ/平衡を失った世界』、メリエス『トルコの死刑執行人』『マジック・ランタン』、ラング『メトロポリス』。

●1995年●イタリア●カラー・86分●監督・脚本・撮影・編集／シルヴァーノ・アゴスティ●音楽／エンニオ・モリコーネ

E カーネーションの卵 *Uova di garofano*

第2次大戦の終わり、北イタリアは未曽有の混乱を迎えていた。ローマから敗走しつつも未だ北部では勢力を保っていたドイツ軍とファシスト。彼らに抵抗するパルチザン。シチリアから北上を続ける連合軍。幼少期に激動の時代を体験したアゴスティが、子供たちの無垢ながら聡明な視点を通して活写した自伝的作品。大人になった少年の長いフラッシュバックとして物語が展開する。戦時中生きたくても生きられなかった子供たちに捧げられている。

あのフェリーニやベルトルッチも絶賛した、正真正銘アゴスティ監督の代表作。

●1991年●イタリア●カラー・103分●監督・脚本／シルヴァーノ・アゴスティ●音楽／ダニエーレ・ヤコノ●特別協力／アンドレイ・タルコフスキー

F 天の高みへ *Nel più alto dei cieli*

北イタリア田舎町の代表団がヴァチカンで法王を表敬訪問する。老若男女さまざまな立場のメンバーは、一様に胸を高鳴らせ、謁見の間へと移動するためにエレベーターに乗り込むのだが…。人間の本質について思いを馳せざるをえない衝撃の問題作。終映後、ルイス・ブニュエルは「隠喩のようだが、おぼろげではない。はっきりしている」とつぶやいた。そのブニュエルの『皆殺しの天使』(1962年)と比較する人もいる問題作。

テーマ、内容があまりに過激だったため、公開前にフィルムを接収され、10年以上もの間、日の目を見ることのなかかったいわくつきの作品。他の作品と比べて目立つフィルムの傷がそのエピソードを如実に物語っているようだ。

●1976年●イタリア●カラー・83分●監 督・脚本／シルヴァーノ・アゴスティ●音楽／ニコラ・ピオヴァーニ

『快楽の園』は、アンタッチャブルでオンリーワンだ。君にはほんの一握りの人しか持ち合わせていないものがある。それは眼だよ。映画作りをこれからも続けると私に約束してくれないか。
—イングマール・ベルイマン

君の映画館で『カーネーションの卵』を観たよ。すばらしかった。あんまりすばらしかったから、君の本を全部買ってしまったくらいだ。ただし、『映画の撮り方』以外をね…　—フェデリーコ・フェリーニ

君の『カーネーションの卵』に終わりがあったのが残念でね…。僕はもっとずっと続いてほしかったんだよ。
—ベルナルド・ベルトルッチ

シルヴァーノ、すごいぞ、君は我らが映画界の人間大砲だ。
—エットレ・スコラ

私は『快楽の園』のみずみずしさをとても気に入った。
—ジャン・ルノワール

『快楽の園』は子供が作るような映画だな。創造する自由を持った子供がね。　—フリッツ・ラング

私はシルヴァーノの『クワルティエーレ 愛の渦』のために作曲をしました。私が思うに、シルヴァーノは現代の才能あふれる完璧な監督のひとりですよ。—エンニオ・モリコーネ

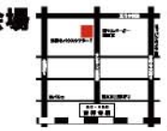
『天の高みへ』はとても卓越した何かをはらんでいる。シルヴァーノのカトリシズムは集団の無意識の中でその根源を掘り起こしている。—アルベルト・モラーヴィア

『ふたつめの影』は、シーツ回収人に化けた精神科医フランコ・バザーリアがゴリツィア県立精神病院の地獄絵を観察するシーンで始まります。1961年のこの光景こそが、精神病院を廃絶したイタリア精神保健改革の原点です。
— 第一回フランコ・バザーリア学術賞 受賞　大熊一夫

□開催期間
2011年 12月3日(土)～16日(金)

□料金
一般1500円　シニア・バウスシアター会員1000円　学生1300円
回数券(3回)3500円(劇場のみで販売。3名様でのご利用も可能です)
〈各回入替制／連日10:30より当日全回分の整理番号の受付を開始します〉

□会場



吉祥寺バウスシアター
吉祥寺駅北口(中央口)／サンロード街／西友先左側
tel.0422-22-3555
http://www.baustheater.com　自由席・入替制

□作品内容についてのお問合せ
大阪ドーナッツクラブ➡ info@osakadoughnutsclub. com